

中国60年代と世界

第2期第14号(通巻第21号) 2019.4.30

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告…(1) / 4月例会予稿例会予稿 1989年春 北京外語学院(一外)留学生の見た民主化運動…小川強(1) / 翻訳ノート「記録」と「記憶」…及川淳子(3) / 廖亦武『銃弾とアヘン』をめぐる作者インタビュー…訳・鳥本まさき(4) / 廖亦武『銃弾とアヘン』の「六四暴徒」補説…土屋昌明(8) / 今後の研究会予定(14) / 蔵出し批評 日本における東洋史学の伝統(下) 旗田巍…解題・前田年昭(15) / 王兵映画割記(その1)…土屋昌明(20)

例会報告 (2月28日)

李鋭氏の葬儀報告および廖亦武『銃弾とアヘン』

当日、遺憾ながら、翌日に入試があるため、1時間しかとれないことが判明し、急遽、及川氏から2月16日に亡くなった李鋭氏の葬儀の報告をしていただくことになった。

葬儀に行くべきか判断に迷ったが、とりあえず行って観察してみようと思い直し、行くことにしたとのこと。現地は、厳戒状態で、警察の数が多かった。及川氏は奥まで行けたが、報道関係者は式場の中に入れなかった。

葬儀会場は、写真も音楽もない、殺伐とした雰囲気、一個の人間として普通に葬儀できないことに憤りを感じさせられた。また、遺品に関する遺族の考え方もいろいろあり、例えば日記がスタンフォード大学フーバー研究所に寄贈されたが、その扱いは色々な思惑があったらしい。

参加して痛切に感じたのは、李鋭のように現実に対峙していた人物のことを文字にしていくのは非常にしんどいことで、彼の残したことに、外国人とし

てどのように向えるかを考えておくべきだということ。このことは、李鋭に対してだけでなく、廖亦武の『銃弾とアヘン』の翻訳(特に劉曉波・劉霞らの文章の翻訳)にしても同様だ。及川氏にとっては、中国に関わる自分の原点が六四天安門事件で、自分が中国語を勉強し始めてからのすべてが六四につながる、という認識だとのことである。

最後に、廖亦武が『銃弾とアヘン』のインタビューをしていた2006年前後に、及川氏は劉曉波の取材をしていたことに議論が及んだ。文化大革命以来の地下文化は、六四天安門を經由して九十年代まで影響が続いたが、ゼロ年代の前半くらいまで動きが鈍り、廖亦武はその最後の段階でインタビューをしていたのである。このような地下文化の動向を認識する必要がある。また、『銃弾とアヘン』には「天安門の母」による死者リストがあるが、内容的に古いので、呉仁華が作成している死者リストに注目すべきだという意見が出た。(編集部T)

4月例会(2019年4月25日)報告予稿

1989年春 北京外語学院(一外)留学生の見た民主化運動

小川強

4/15 胡耀邦死去

留学生宿舎では金日成の誕生日を祝う北朝鮮留学生が大騒ぎし、クレームをつけたソ連人留学生との間で乱闘が発生、公安が出勤する事態に。

4/18

初めてのデモ参加、北京大学からスタートして人民大学、中央民族学院、北京師範学院を軽油して天安門広場がゴール。他大学は分からないが、北京外語の場合、学生運動にはあまり熱心ではなく、デモ行進の参加者が少ないと恥ずかしいので、留学生の

小生にまで声がかかり参加。政治に無関心で流行に敏感な北京外語の学生を、他大学の学生は「北外虫」と蔑んでいたのを意識したのかも。

4/19 中南海で学生と警官隊が衝突

深夜、中南海で何かを要求するというので見学に行ったら、デモに巻き込まれ、新華門外で警官隊と衝突。「李鵬出て来い」のコールを繰り返した後に、強行突破を試みるが失敗。かなり激しい押し戻しがあったが、けが人はなかったようだ。(小生24歳の誕生日)

4/20～

ようやく北京外語の学生も運動に積極的にかかわるようになった。連日、いたるところで抗議集会有り、政府ブローカーの腐敗と教育関係者の困窮を訴えていた。留学生の授業はやっていたようだが、この頃からほとんど授業に出ず、北京大学の大字報を写したり、抗議集会を見に行ったりと無秩序な生活を送っていた。

4/26 人民日報「動乱」と断定

学生が政府との対話要求を多くするようになり、テレビ・ラジオでその一部が放映されていた。抗議集会では「人民日報、胡説八道」が叫ばれていた。

5/4 学生デモ 新五四宣言

北京外語日本語系としてデモに参加。天安門広場に到着後、世界各国記者達の学生リーダーへの取材に対し、北京外語の学生が通訳として活躍し、北京外語ここに在りの存在感を示せた。

5/13～ 無期限ハンスト開始

天安門広場でハンガーストライキ開始。北京外語日本語系も3～5人ぐらいがハンストに挑戦し、仲間達がそれを周りで囲んで支援するかたち。小生も、留学生達から託された支援食糧やペットボトルの水を大量に持って広場へ行く。かなり嚴重に広場への入場チェックを学生達がしていたが、という訳か、ここでもフリーパスで入場できた。2日目ぐらいになると、倒れる学生が出て、救急車が頻繁に広場に

来て搬送していった。連結バスをトイレにしていたが、床に穴をあけただけのもので、汚物は広場地面に垂れ流しなので、不衛生で匂いもひどく、さすがに政府は、公式イベント用にしか使われないであろう天安門広場簡易トイレの使用を許可したか命じた。

5/19 趙紫陽ハンスト学生慰問

この日広場に行くと、早朝、趙紫陽が広場にきた事を知らされる。趙紫陽の話した「我老了」「無所謂」等を真似するのが流行った。この頃から北京外語の学生も、広場にテントはあるものの、大方は大学にもどり、広場では停滞ムードが漂っていたように思う。

5/30 民主の女神像立つ

この日も日本語系の友人に誘われ広場に行く。何かを広場に作るというので行ってみると、中央美術学院の学生が作ったという民主の女神像が運ばれてきて、天安門の毛沢東の肖像に向き合う形で設置された。停滞ムードを何とか打開したいという試みだったのだろうか。広場では、地方大学のテントが目立つようになり、北京市内の大学もその一つにすぎないような規模になっていったようだ。

6/3 天安門事件前夜

夜8時頃に日本人留学生の岩田君と宿舎を出発し、自転車で行く。王府井に自転車を置き、広場へ行くと、友人の日本語系の副リーダーの2年生郭強君がいて合流する。

6/4 天安門事件当日

一連の事件を体験目撃し、昼前頃宿舎に戻る。

6/5～6/8 強制帰国勧告

事件後、宿舎の日本人留学生達はパニック状態になっていた。本来7月に留学が終わり、旅行でもしてから帰国を予定していた留学生達は、急遽帰国しなければいけない状況に陥り、混乱を極めていた。切羽詰まった状況で日本に荷物を送る余裕も手段もなく、手荷物は20キロまでの指示が大使館からあったので、何を持ち帰るか皆苦労していた。1か月前倒しで修了証書が配られ、帰国準備が出来た人

から、大使館の用意したバスで空港へ向かった。小生は、元々 2 年間留学予定であと 1 年残っていたので、帰るつもりはなかった。何より同室の、一緒に留学に来た瀬賀君が、新疆に旅行に行ったままで帰って来ていない。この状況で帰国する事は出来ないと思ひ、寂しい留学生宿舎で彼の帰舎を待っていた。その後、大使館から宿舎に連絡があり、強制帰国勧告が出たので迎えに行くから準備しろ、帰国しないなら「一切の責任は自分で負います」との念書を書けと言われた。瀬賀君の事は宿舎のスタッフにお

願いして、取り敢えず一時帰国する事にした。日本政府が臨時で用意した特別機で、当時の三塚外務大臣のお出迎えのもと帰国した。

後日譚

同じ宿舎の日本人留学生が重量制限で持ち帰れなかった物資、食糧や自転車から人民元まで大量の処理処分を任せられ、9 月からの留學生活前半は本当に裕福で恵まれた生活ができました。

(2019.3.31)

翻訳ノート

「記録」と「記憶」

廖亦武の話題作『銃弾とアヘン——「六四天安門」生と死の記憶』の邦訳がついに刊行される。1989 年の天安門事件から 30 年の節目にあたる今年、日本における関連図書の出版企画として、重要な一冊となるだろう。

共訳者の間で本書の書名と副題について検討した際に、「記録」と「記憶」のどちらがよいかという議論になった。結果的に、副題は『「六四天安門」生と死の記憶』となったが、「記録」と「記憶」について考察すること、とりわけ六四・天安門事件に関するそれらは、興味深い研究課題だ。

筆者が翻訳を担当した李紅旗へのインタビューの中で、もっとも印象深かったのは、証言の最後に記された次の言葉だ。事件後に服役して刑期を終えた李紅旗は、暮らしぶりを問う廖亦武に「世の中で何とかやっつけていけるようになった」と答え、「もっと重要なのは、おれたちのようなやつがまだ生きてるってことだ。豚や犬みたいに生きていても、それでも生きていけるってことだ。豚や犬と違うのは、おれたちには記憶力があるってことだ」と語る。当事者が「記憶」に留めること、さらにその「記憶」を他者と共有することは、「豚や犬と違う」人間としての生き方なのだという力強い言葉で、本書の意義を問いかける強烈なメッセージだ。

歴史の「記憶」について考察する時、折に触れて

読み返すのは、出版という「記憶の共同化」について論じた福岡愛子氏の名著『文化大革命の記憶と忘却 回想録の出版にみる記憶の個人化と共同化』（新曜社、2008 年）である。「過去の体験が社会的政治的文脈によって選択的に想起され、現在の時点から再構成される」という『記憶』の現在的・社会的側面（同書、3 頁）という指摘は、文化大革命だけでなく、重大な歴史事件と個人との関係性において普遍的であり、言うまでもなく六四・天安門事件についても同様だ。

「記憶の再構成」という観点で本書を読みながら、以下のようなことを考えた。歴史における「記憶」、あるいは「記憶と忘却」の問題とは、例えば六四・天安門事件という過去の「記憶」を扱いながら、「記憶」が想起される時点での現在性を有する問題でもあるということだ。ある種の「記憶」を有する人々が、どのような動機や意図をもってその「記憶」を想起し、「再構成」するか否かという問題は、「記憶」の内容が「記録」としての整合性を得ているか否かということだけでなく、それ以上に、どのような「記憶」が、誰によって、どのように「再構成」され、他者との関係性の中で「再生」され、「共有」されるかという、主体性と現在性の問題だといえよう。

本書の大きな特徴は、六四・天安門事件の際に「暴徒」として逮捕された人々が、想像を絶する拷問を

受け、自らの実体験を廖亦武のインタビューに答えて克明に語っている点でもある。激しい拷問の様子や警察との応酬は翻訳者を悩ませる表現ばかりだったが、これほど克明な「記憶」が語られていることは、まさに本書の歴史的な意義だろう。

歴史の「記録」は、正確かつ詳細であることが望ましいが、歴史の一部となった個人の「記憶」については、「記憶の再構成」あるいは「記憶の再生」という視点で検討する必要があるだろう。本書で廖亦武のインタビューに答えた人々は、共通の友人を介して廖亦武と出会い、事件によって投獄された経験を共有する者同士という特殊な関係性を前提として、自らの「記憶」を再生している。六四・天安門事件について語ることが政治的タブーとされている中国において、本書は極めて貴重な「記憶の共同化」である。

「記憶の再生」についてももう少し考えを巡らせると、「記憶」の時間軸にいくつかの点が刻まれていることに気づく。つまり、本書に登場した彼らの人生を大きく変えることになった1989年の事件当時、

廖亦武のインタビューに答えた2005年前後、廖亦武によってインタビュー内容が書き起こされた時期、それらが編集作業を経て出版された2012年、そして、翻訳作業を経て日本の読者が手に取っている2019年という点だ。そうした点の連なりは、「記憶」として構成され、再生され、共同化され、忘却を拒絶するために再構築されていく過程でもある。「転換点」か、あるいは「岐路」か、「ターニング・ポイント」と言うべきか、「メルクマール」と言うべきか、筆者にはまだ適当な語彙が見つからないが、今年、六四・天安門事件30年という点に座標軸を合わせた本書の出版は、著者や翻訳者は言うまでなく、読者もまた六四・天安門事件をめぐる「記憶の再生」を担う存在だということを考えさせられる。

本書の翻訳作業で、個人的にもっとも印象深かったのは、廖亦武が克明に記した劉曉波と劉霞に関する「記録」と「記憶」である。これについては、また稿を改めて記したい。

(おいかわ じゅんこ、中央大学)

廖亦武『銃弾とアヘン』をめぐる作者インタビュー

鳥本まさき 訳

* 廖亦武『銃弾とアヘン』日本語版の出版に備え、自由アジア放送 (RFA) が2017年9月8日および13日に放送した作者へのインタビューを抜粋して紹介したい。

廖亦武インタビュー(一)：「六四」後、エリートは亡命したが、「余志堅たち」は完全に忘れられた

記者：こんにちは、廖さん、私たちの取材を受けてくださり有難うございます。まず記実文学 [ドキュメンタリー文学] 作品の「子彈鴉片」についてお話ししていただきます。この本は「六四」30周年、つまり2019年に英語、仏語版が最新の改定版として世界同時発売されるそうですね。あなたのこの改定版と以前に出版した版を比べるとどんな点が補充さ

れ、また改定されているのでしょうか？

廖亦武：私は十数年前、だいたい2005年当時、武文建という「六四暴徒」に出会った。彼は芸術家でもあった。武文建は当時、非常な憤怒の中にあり、彼は私に「歴史はあんたたちエリートによって支配されている」と言った。「軍の車を阻止した俺たち、百万にも及ぶ北京市民、こうした人たちが『六四大虐殺』の主体のはずだ」と。私をも罵り、劉曉波をも罵り、たくさんの人を罵った。完全に理性を失い、罵りの言葉は汚く下品だった。私はその時非常につらかった。それまで私は「六四」のいわゆる「暴徒」たちに全く関心を持ってこなかった。私はなおも自身の入獄の中に、苦難の中に浸っていた。そう言われた後、私は「では私の第一の取材対象はあなただ」と言った。そして、武文建の案内の下、私は十数人

の「六四暴徒」にインタビューした。

記者：この改定版に収録されている人はその前に比べて若干多くなっていますね？私は数えてみたのですが、あなたを入れて21人、そうですね？

廖亦武：そうだ。その後ずいぶん増えた。この新バージョンの第1篇は私が余志堅に書いた弔辞：「這箇人死了，越過山巔」[この人は死んだ、尾根を越えて]だ。第2篇は「タンク人・王維林の伝奇」。この二人をはじめに置いたのは、これが「六四」大虐殺の二人の悲劇的英雄だと考えるからだ。

記者：ええ、知っています。王維林氏は今にいたるまで消息不明、一方で「天安門三君子」【訳注：魯徳成、喻東岳、余志堅の三氏が「天安門三君子」または「湖南三壯士」と呼ばれる】の一人、余志堅氏が、あなたが「六四」30周年のときに西側世界でこの本を出そうと決意した、とても大きな動因の一つとなったと聞いています、そうですね？

廖亦武：そうだ、私の個人的な原因は主に余志堅の死のためだ。私は、これらの死んでいった人と幸存者[サバイバー]たちに一つの申し開きをしなければならぬ、と思った。要するに、私はすまないことをした、と思った。少なくとも余志堅に。余志堅は当時私に尋ねていた。彼は「今でも英語ができない。インディアナ州で、俺を知っている者はだれもない、俺がここでできるのは清掃工しかない」。そして彼はこう聞いた。「あんたのこの英語版の『子弾鴉片』はいつ出版されるんだい？」と。私は当時このことを全く気に留めていなかったで、「それは仲介マネージャーが決めることだ」と言った。私は当時、余志堅や喻東岳たちも英語ができないことに思い至らなかった。中国人が知っていても、西側の人たちは彼らを知ることはできないのだ。3月30日、彼の妻のフェイスブック上で余志堅が突然、思いがけないことに死んだことを知った。私がある時受けたショックはとても大きかった。彼にすまないことをした、と思った。彼があるとき私に電話をかけてきたのはこういう意味だったのだ、と——もし『子弾鴉片』が、彼の生前に出ていれば、多くの人々が彼のことを知ったに違いない。彼のことを知れば、彼はきっと多くの支援を得られたのだ——

記者：なぜこの本に『子弾鴉片』という名を付けた

のですか？

廖亦武：子弾というのは、あの年、共産党が砲弾・銃弾を用いてこれらの人たちをあしらったこと、その後、鄧小平は南巡[講話]以降、鴉片煙[アヘンの煙]を用いてきた。この麻酔薬でこれほど長い年月、麻酔をかけ続けている。中国人全体が麻酔にかけられてしまったのではないか？ 金銭という麻酔に。そして西側の人たちも麻酔にかけられた、そうではないか？

記者：西側の人たちが麻酔にかけられたというのは、西側も中国と貿易のやりとりを望んだということを言っているのですか？

廖亦武：そうだ。西側の人々が中国人と付き合う際に、中国人が金をばら撒けば、彼らは喜び、上機嫌になる、というのを、私はアヘンを吸うのと変わりはないと思っている。

記者：あなたが本書に収録した引用符号付きの「六四暴徒」のほとんどの人が当時、20歳前後であることに気づきました。「六四」前後の数時間ひいては数分の反抗によって、彼らの一生は変えられてしまった。あなたが接触する中で、彼らはいったいどのような一群だったか、私は知りたいのですが。

廖亦武：北京だけでなく、成都でもその他の地方でも、最後には、学生ではなくなっていた。市民が共産党に直接対抗していた。もちろん、そこでは軍の車を焼く、石を投げる、火炎瓶を投げる、など、いくつかの極端な方法が取られた。ここで言う火炎瓶は自分たちで作ったもので、サイダーの瓶にガソリンをいっぱいに入れてから布を瓶に突っ込み、投げる。つまり「六四」、「六五」の最後の段階では、王維林がタンクを遮ろうとしたころには、学生はすでにいなかった。主に市民だった。このことは中国の歴史において唯一の、中国の庶民が主体となり、独裁政権に直接対抗したものだと思ふ。だが最後になって、尊敬を受けたのは幾人かの学生リーダーだけだった。当時彼らはみな国外に逃亡していたのだ。吾爾開希(ウルケシ)は「当時フランスで、フランス大統領も自分たちに接見してくれた。フランス人はとてもロマン主義的で、彼らは英雄のように接待してくれた。ラフィットの造酒工場は、ウルケシの名と頭像でコンテナ一つ分の酒を造った」と私

に話してくれた。

記者：だから学生が受けた英雄的な待遇と比べて、こうしたいわゆる「六四」の暴徒たちの境遇は、やはり非常に悲惨ですね。一つ教えていただきたいのですが、これらのいわゆる「六四」暴徒たちは平生、どういう人たちなのですか？ 中共政府が宣伝しているように到底許すことができない極悪者ですか？

廖亦武：いや、彼らはまったくの普通の労働者、市民だ。真面目なところ、89年当時に成功していれば、共産党を覆していれば、彼らに何の問題も起こらなかっただろう。その後、余志堅の話で、彼らは当時あんなにもすごい壮挙をなしたのに、最後には影をすっかりひそめてしまい、誰も彼らを覚えていないということを私は理解した。

記者：あなたが取材した人物の中には猶予つき死刑や無期懲役の判決を受けた者もいて、大多数が20年近くの有期刑という最長の刑期を科されていることに気づきました。もちろん、すでに処刑された人たちは含まない。これと比べて、逮捕された学生リーダーや普通の学生の中では、これほど重い刑期を科せられた人はとても少ない。あなたはこの現象をどう解釈しますか？

廖亦武：これは（一方で）学生に西側メディアのスポットライトが集まったからだが、（他方で学生は）「学生運動」だと定められてしまった。そして、これらの庶民は「社会の閑雑」と定められた。「社会の閑雑」というのは〔当時の首相〕李鵬が発明した言葉だ。それが定める性質は、まさにごろつき、社会のクズ、コソ泥、ならず者。彼らに付せられた定性はこうしたものだったが、学生に対してはこうした定性は付けられなかった。学生は学生だから。…中略…

記者：あなたのこの本の改定版は「六四」30周年のためだということは存じております。この本を通して読者に何を得てもらいたいですか？

廖亦武：つまるところ、この本の英語版を出すのも、注意を喚起する最後の機会になるかもしれないと思ってのことだ。30年ということで、西側メディアはこのことに注意を向けるだろう、と。

記者：あなたは「これが最後の機会だ」とおっしゃる、つまり「六四」に参加したこれらの一般民衆に声を上げる最後の機会を与えようと、そういうこと

ですね？

廖亦武：そうだ。でないとならばこれまでの軌跡のとおり、また毎年記念し、何度も振り返ってきた歴史をやはり振り返るだろうが、これらの普通の庶民は、これらの「六四」で暴力に抗った人たちの本当の歴史はまた隠される。真相はまた隠ぺいされてしまう。私は一時代の録音機として、一人の歴史の目撃者・証人として、この段階で一つの役割を果たすことができれば、それで十分満足だ。

廖亦武インタビュー(二)：中国人の現代史は恥知らずの上に苦難が重なり、苦難の上に恥知らずが重なった

記者：廖さん、中国の1980年代について話しましょう。80年代は詩情の時代だと言われますが、廖さんは詩人として、どう思われますか？

廖亦武：私はあの時代が何々時代だったなどとは考えない。というのも、あの頃は毛沢東の文化大革命が終わり、翻訳への熱狂があった。歳が上の世代が、こっそりたくさんのものを翻訳しており、80年代になって発表した。私が触れたのもそうしたもので、その前には、古文の教師をしていた親父からの古いものしか触れていなかった。それから私は急に西側の小説や詩など、あらゆるものに翻訳で触れたんだ。たとえば、ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』も『世界文学』で発表され、ウォルター・ホイットマンの詩や、告白詩人シルヴィア・プラス (Sylvia Plath)、また「ビートジェネレーション」のギンズバークの「吠える」など。当時私たちは前衛青年として、ボブ・ディランの音楽も聴いた。これまでと全く違うものだったから、私は親父に反抗し出し、親父とは反対のことをするようになった。

記者：前回の放送で、あなたは監獄で受けた様々な酷刑について話してくれました。あなたは出獄後、四川省の老詩人の流沙河 [1931-] のところを訪問されたと聞いています。その時に彼から「運命によって重傷を負った人の、心の内の刀痕は死ぬまで消えるものではない。それなら君は詩人を捨て、歴史の証人になったらどうか」と言われたそうですね。これがドキュメンタリー文学を書き始めるきっかけ

になったのでしょうか？

廖亦武：出獄後しばらくして彼を訪ねた。当時はそれが何を意味するかわかっていなかった。しかし当時、何かをして生きて行かなければと思っていた。収入がなかったからね。外国の基金が私をサポートしてくれるわけでもなかったし。当時、出てきてから、バーで簫を吹いたり、歌を歌ったりの芸を売っていた。苦難を味わったのもそうだが、その苦難が人々に忘れられる、というのも、耐えがたかった。受けた苦難が徒労に思えてね。

記者：でも、そうした経験がその後の執筆にどういった助けとなっていったとお感じですか？

廖亦武：その後、これら低層の人たちの経験を記録し始めた。彼らと与えてくれる教訓は、非常に恥知らずなものだった。こうした中国人の歴史、特に現代史は苦難、恥知らず、恥知らず、苦難の連続だ。恥知らずは彼らをさらに苦難に陥れ、苦難は彼らをより恥知らずにする。

記者：より具体的に説明してくれませんか？

廖亦武：私は獄内であるバラバラ殺人犯と一緒にいたことがある。彼はいつも私に妻をどうバラバラにしたかを話して聞かせた……。私は吐きそうなくらい気持ちが悪かった。そして彼は毎回、「お前が俺の最後の聴衆なのだから、お前は聞かなければならない」と言った。私は当時、彼の顔を張り倒したくてたまらなかった。だが、後になって、彼らのことを書き残すべきだと思うようになった（『中国低層訪談録』に収録）。

記者：あなたはこうしたいわゆる恥知らずの人間へのインタビューを残しましたが、どのような意義があるとお考えですか？

廖亦武：当時はあまり深く考えていなかった。とにかく書き残さなければならぬ、と。彼は私に何度も話すから、私は夢にまで彼が出てくるようになっていたからね。書いてみるとそれがほぼなくなった。

記者：書いたらその夢を見なくなった。実は聞いてみたいと思っていたことなのですが、残酷な監獄生活と、あなたよりさらに悲惨な経験をした人々への長期にわたるたくさんの訪問取材による悲惨な物語、あなた自身の心も傷を負いませんでしたか？ こうした苦痛に満ちた経験によって、あなたの心もゆが

められるようなことはなかったですか？

廖亦武：とにもかくにも、彼らを書いてしまえば良くなるんだ。これは自分の職業だと思えば、一人の作家の頭の中にあることを書いて表現しないほうが奇妙なことだよ。

記者：あなたは証言することの意義のほうが、文学的意義より大きいとおっしゃったことがあります。「真相が第一で、文学は第二だ」と。どうしてこのようにおっしゃるのですか？

廖亦武：それは当然のことだよ。基準があるんだ。中国のああした作家たちが、あの天安門の大虐殺に触れようとするかい？ 彼らは触れる勇気はないよ。閻連科にしろ、莫言にしろ、彼らは彼らの苦難や残忍さを訴えかけるが、天安門の大虐殺について一文でも触れたものがあるか？ これこそが私の一つの基準なんだ。考えても見てくれ、旧ソ連には、スターリンや反革命肅清運動を扱う作家がいた。そうしたタブーの領域にも触れて行ったんだ。彼らは、自分たちの行く先に何が待っているか、明らかにわかっていたにもかかわらず、やっぱり書こうと思った。これこそが彼らの真実性だったんだ。私は非常に偉大なことだと思う。中国のああいった作家たちは、西側の人を欺いているだけだ。西側の人たちは、中国の状況を理解していないからね。それで莫言がたくらみを達したわけだ。

記者：では、あなたには新たな執筆の計画がありますか？ これほどの苦難を経験して、詩はまだ書いているのですか？

廖亦武：2年前に長編詩「監獄祠廟」を書いた。この監獄とは修行の場、ということだ。私のこれからはとても自由だ。海外の亡命生活を書くかもしれない。あと「最後の地主」が残っている。手元にたくさんの取材録がある。土地改革についてだ。

* ソースは以下。

<https://www.rfa.org/mandarin/zhuannlan/zhuantixilie/lyw1-09082017114612.html>

<https://www.rfa.org/mandarin/zhuannlan/zhuantixilie/lyw-09132017122201.html>

廖亦武『銃弾とアヘン』の「六四暴徒」補説

土屋昌明

『銃弾とアヘン』の作者・廖亦武は、ペンネームを老威といい、1958年、中国四川生まれ。詩人、民間芸人、底層の歴史の記録者、亡命作家である。1989年の天安門大虐殺の夜に長詩「大屠殺」を創作して朗読し、1990年に映像詩『安魂』を撮影したことで逮捕、反革命罪で懲役4年となった。獄中で数々の暴行を受け、2度自殺を図った。釈放後、ペンネームで『中国底層訪談録』などを出版して禁書とされる。この書は2008年5月に英文版が出て、海外で一躍名を馳せた。中国国内では厳重な監視を受け、何度も家宅捜査を受けて数百万字の原稿を没収され、そのため『六四・我的証詞』は3回書き直したという。出国禁止は17回に及ぶ。2011年7月、アメリカとドイツで『上帝是紅色的』『六四・我的証詞』の出版準備をしていることが知られ、警察から逮捕の警告を受けたのを機に、ベトナム国境を越え、ドイツに亡命した。その後、海外で『川菜厨子』『古拉格情歌』『子彈鴉片』『毛時代的愛情』『輪廻的螞蟻』『逃出中国的漫漫旅途』等を発表した。彼の作品は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、ポーランド語、チェコ語、スウェーデン語、デンマーク語、オランダ語、日本語など20の言語に翻訳されている。本人の説明によれば、彼はノーベル文学賞の候補として、関係者からたびたび推薦されているとのことである。邦訳には『中国底層訪談録』（劉燕子訳、集広舎、2008年）がある。ドイツ書籍販売者平和賞など海外の数々の賞を受賞。現在、ベルリン在住である。

本書『銃弾とアヘン』は、廖亦武が1989年6月4日の天安門事件の被害者に対しておこなったインタビューを中心に、若干の廖亦武自身のエッセイを加えた文集である。今回、訳者（鳥本まさき・及川淳子・土屋）が日本語訳をおこなうにあたって、著者提供の改訂版を使った。これは、数年前に台湾から出版された原著『子彈鴉片』から廖亦武本人が数篇を割愛し、別の文章を加えた新しいテキストである。

本書のインタビューの順番は、原著とも相違しており、何らか改訂版の編集の狙いがあると思われるが、今のところよくわからない。インタビューの対象者と順番は次のようである。李斉・王岩・武文建・余志堅・張茂盛・董盛坤・呉定富・劉儀・胡中喜・李紅旗・王連会・余万宝・李海・李必豊、合計14人。本稿では、彼ら個々の人物について考えてみたい（紙幅の関係で、残念ながら若干名しか取り上げられない）。と言うのは、彼らはそれぞれ相違した状況で被害者となっており、一人一人を考えることで、天安門事件を色々な側面から見る事が可能となるだけでなく、天安門事件以降の諸事情および現在に至る状況がよく理解できるからである。

まず、インタビューの年次によって並べ替えると、次のようになる。

余万宝 1993年1月3日

李斉 2003年3月2日

李必豊 2005年5月18日

呉定富 2005年5月19日

武文建 2005年5月26日

王岩 2005年12月17日

李海 2005年12月17日

劉儀 2005年12月20日

胡中喜 2005年12月20日

李紅旗 2005年12月21日

余志堅 2006年6月9日

張茂盛 2006年12月27日

董盛坤 2006年12月27日

王連会 2007年1月2日

これによって、次のようなことがわかる。まず、余万宝へのインタビューは、廖亦武が獄中でおこなったものである。廖亦武はこれを何らかの形で記録に残し、秘密裏に獄中から持ち出したわけである。獄中でのインタビューとして非常に重要かつ興味深いだけでなく、廖亦武がインタビューという表現形式を獄中で着想した端緒の一つとみることもでき

る。次の李齊は、友人として廖亦武が自宅に訪問を受けたものである。李必豊・呉定富・武文建は、2005年5月26日前後に廖亦武が北京で連続して取材したもの、王岩・李海・劉儀・胡中喜・李紅旗らは、2005年12月下旬に連続して取材したもの、余志堅については、2006年6月9日に単独で取材したもの、張茂盛・董盛坤・王連会らは、2006年末から2007年初に取材したものである。つまり廖亦武は、2005年から2007年の間に、北京に住む被害者に事前に時間を調整して、インタビューをまとめておこなっていたことがわかる。その紹介と日程調整をしたのは、本文にたびたび登場する武文建であるようだ。また、映画監督の班忠義が同行する場合があります。映像記録を撮る考えもあったようである。特に余志堅へのインタビューでは、班忠義が警察に逮捕されたかのような書き方をしているが、台湾版の原著では、文末で単なる行き違いだったことが明かされる。廖亦武は警察の家宅捜査をたびたび受けているから、このような杞憂が生じたのである。つまり、これらの取材と原稿は、警察の捜査をかいくぐってきたわけである（特に余万宝へのインタビューが残ったのは奇跡的と言えるだろう）。そして、廖亦武本人も2011年にこれらの原稿を持って亡命し、その後この原稿を整理したのだろう。

以下とりあえず、特に重要な4名について蛇足的な説明を加えてみたい。

余万宝

余万宝へのインタビューは、『中国底層訪談録』にも別人の名前で掲載されているが、『子彈鴉片』で実名発表された。この件について余万宝の友人で支援者の欧陽懿によれば、2005年に出たばかりの老威『中国冤案録』第1巻を見たときに、そこに登場する「万宝成」は余万宝のことではないかと疑ったという（「噫！一鱗半爪，話說余万宝先生」『議報』第212期、独立中文筆会HP）。つまり余万宝へのインタビューは、初め『中国冤案録』第1巻に掲載され、その後、『中国底層訪談録』に転載され、再度『子彈鴉片』に掲載されたのである。

余万宝は1958年生まれ、もと四川のある銀行の副頭取だったが、天安門事件当時、用務で北京に出

張していた。6月4日午前、翠微路のホテルの窓から、階下を逃げる青年が解放軍の兵士によって射殺された瞬間を目撃した。憤りからそれを文に書き、100部コピーして配布し、それによって逮捕され、懲役4年となった。彼の話から、天安門の西、復興路から一本入った翠微路などで、4日の午前中までほしほしに殺人がおこなわれたこと、解放軍の殺人行為を書いて頒布しただけで、罪に問われたことがわかる。

本インタビューでは、六四に際しての彼の具体的な行動は、これ以上語られていないが、欧陽懿の前掲の文に引用された本人の身上書によれば、北京の朝陽区で解放軍の行為について演説を二回おこない、陝西省西安市、四川省広元市で「悼英烈有感（英烈を悼んで感ずる有り）」「中国政体改革向何方（中国政体改革はいずこへ向かうか）」「歴史中共罪惡史（中共の罪惡史を数え上げる）」などの文章を書いた。このうち「悼英烈有感」は、ルート不詳だが、香港『大公報』に掲載され、広元市で数千部印刷され、成都・西安などで頒布されたという（寄稿・印刷・頒布した者は不詳）。

彼の話でさらに驚かされるのは、獄中でのインタビューでありながら、出獄後に民主活動をおこなうと語っていることである。この記録が監獄管理側に伝われば、拘留の延期や懲罰がありうる話だ。その大胆不敵と廖亦武への信頼は、私たちの想像を超えている。

余万宝が予告した、出獄後の民主活動について、本書の他の章に言及がある。彼と同じ刑務所に投獄されていた李必豊によれば、「数年後に余万宝が中国民主党の件で再び罪を着せられ、12年の判決を受けたのは思いもよらなかった」という。李必豊は廖亦武の親しい獄友である（後述）。この点から、廖亦武に語った余万宝の民主への意志は、獄友に共有されていたわけではないことがわかる。

中国民主党の事件というのは、1998年下半年期に中国民主党を称する人々が大量に逮捕された思想弾圧事件である。

1997年10月、中国政府は「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」（いわゆる社会権規約、A規約）に調印し、「市民権及び政治的権利に

関する国際規約」（いわゆる自由権規約、B 規約）への調印を承諾したが、徐文立と秦永敏が「全国労働者同胞に告げる書」を発表し、これら規約で認められている「自由独立の労働組合」の結成を呼びかけた。さらに彼らは、「人権観察」「公民論壇」などを労組として当局に登録することを求め、非公式の『人権観察』を編集発行、国内外に向けて、中国の人権や社会運動の情報を伝え、始まったばかりのインターネットを使って、「空中民主の壁」を立ち上げ、社会運動を活性化させた。このような動向の中で、各地で民間組織が続々と成立し、活動を展開させていった（銭理群『毛沢東と中国』阿部幹雄ほか訳、青土社、下巻392頁）。こうした動向を受けながら、民主運動家たちは、1998年6月、アメリカのビル・クリントン大統領が訪中（6月25日～7月3日）するのに合わせ、中国民主党の設立準備を進めていた。そして6月25日浙江杭州で、王有才・王東海らによって最初の党設立準備委員会が組織され、浙江省の民政部当局に政党登録の申請をおこなった。王有才は、天安門事件の際に北京大学物理系の院生で、北京市「高自聯」の最後の秘書長、天安門事件後に指名手配され、1991年に懲役4年となった人物である。

同様の動きは北京市、上海市、山東省、湖北省、湖北省、遼寧省、四川省などにも拡大した。こうして余万宝は、四川の成都で劉賢斌・胡明君らとともに中国民主党四川支部を立ち上げ、各地と連絡しながら、当局に結党を申請し、宣伝活動をおこなったのである。ただし、余万宝と劉賢斌は、王有才らの浙江における活動に対して、非常に冷静に、形勢はそれほど楽観視できないと見ていたという。このため、彼らによる民主党四川支部の樹立は穏健におこなわれ、全国の民主運動家から実現が期待されていたらしい（余万宝・劉賢斌と付き合いが深かった林青＝陳青林による。欧陽懿前掲文を参照）。

アメリカ大統領が訪中している最中は、当局は米中間関係の悪化を恐れて関係者弾圧を控えていた。7月3日にクリントンが去ると、当局は弾圧を開始、7月9日に王有才が警察に身柄拘束された後、関係者が相次いで逮捕され、その数は数百人にのぼったという（日本では約30人と伝えられた。『中国年鑑1999』大修館書店、138頁）。

以上の動向について、ある説では、王炳章（1979年にカナダに留学、海外で中国民主化運動に参加）が、中国国内の民主化を求める動きを察知し、1998年1月に中国国内に密入国、各地で現われた中国民主党の動きに対して、中国政府の民政部の社会团体登録係に政党の登記を申請するという合法的な方策を提案して、そのために奔走したという（石平・劉燕子『反旗』育鴻社POD版2017年、217頁）。

江沢民は、中国民主党の樹立を、国内外の敵対勢力の浸透、中国共産党と社会主義体制への挑戦と捉え、徹底的に潰すべしと考えていた。李鵬も1998年12月1日の『人民日報』に「反対政党の出現を絶対に許さない」と宣言している。

1999年に民主党関係者が弾圧された背景には、コソボ紛争にあたって、ユーゴスラビアのベオグラードにある中国大使館がNATO・アメリカ軍に爆撃され、中米関係が一気に冷えたことが、アメリカの人権擁護を気にしていた中国当局の気兼ねを取り払ったためとも言われている（欧陽懿前掲文）。

余万宝の不運はその後も続いた。21世紀に入って、西南部の経済的落伍を挽回しようとする際に、四川省当局はアメリカ資本の導入を考え、アメリカが求める人権向上の要求に応えるために、政治犯の釈放を検討、余万宝の釈放が狙上に上がったが、すぐにニューヨークで9.11テロ事件が発生して、見送りになってしまったという（欧陽懿前掲文）。

この中国民主党の事件があまり知られていないのは、「意図的な忘却と隠蔽が存在する」のであり、事実上、この後も民間における結党・結社の努力はやむことがなかったが、結成されるやたちまち秘密逮捕されることが常であり、外界に知られることは稀であった、と銭理群は指摘している（『毛沢東と中国』下巻390、394頁）。

余万宝は獄中のインタビューの最後に、「運命が私を道の敷石にするというなら、とことんまでやってやる」とつぶやいたが、彼の人生はその実践を貫き、とことん戦い続けるものとなったわけである。

それから10年以上が経ち、余万宝は2010年3月6日に出獄した。出獄時に電話で話した者によれば、彼は獄中で高血圧症・心臓病などの複数の疾病に悩まされたが、電話では恨み辛みは一切語ら

ず、六四と民主党設立に関わったことを後悔せず、気力もしっかりしていたとのことである (<http://www.2008xianzhang.info/tea/20100621shen-wanbao.html>)。



余万宝(博訊)

2011年2月20日の「ジャスミン革命」呼びかけの際、彼は無関係なのに一時拘束されたらしく、同23日のジャスミンの発起人による「声明」で、無関係の被拘束者のリストに彼の名前が見える。現在の彼の状況について詳細はわからないものの、欧陽懿の2018年11月のツイッターによれば、ご健在の模様である。

李必豊

李必豊は1964年生まれ、四川省綿陽市出身、もと四川省綿陽市税務局幹部。1989年に成都で民主化運動に参加して7月5日に逮捕、懲役5年となった。

獄中で廖亦武と親しくなる。廖氏の『六四・我的証詞』によれば、二人はベッドの上下で、李必豊は投獄前に廖亦武の詩作品を愛読していたという。1994年に満期で出獄した後も、何度も拘留を受けた。民間のキリスト教組織に加わり、教徒らと「華人良心關懷行動組織」を設立、全国のレイオフになった労働者や女性・児童の状況について調査した。

1997年7月、綿陽で起こった紡績工場のストとデモの流血事件をニューヨークの人権組織に報告したために、全国指名手配となった(本文に証言がある)。国外脱出を試みるが失敗し、1998年3月8日に捕まり、8月24日に綿陽市涪城区裁判所で懲役7年とされ、四川省川東監獄に服役した。廖亦武によるインタビューは2005年5月18日におこなわれ、それは出所直後だった。その後、2011年9月に廖亦武の密出国を幫助したとして拘留された上、別件の不動産詐欺の罪で懲役12年とされた(「六四維基」を参照。[http://](http://www.64wiki.com/viiv/viiv/eventinfo.php?id=398)

www.64wiki.com/viiv/viiv/eventinfo.php?id=398)。



李必豊(維權網)

廖亦武らによれば、彼は劉曉波と同様、六四天安門以降の象徴的な人物だという。劉曉波は知識エリートとして矜持を持つが、李必豊は草の根、沈黙する大衆の運命を担っている。この貧困と全体主義の餌食となって、鼠のように黙りこくっていた大衆こそが、六四で大義に行動をおこし、戒厳部隊の銃弾を身に受けたのである(同上頁の呼びかけ「製造敵人は危険的—我們呼籲中国政府釈放李必豊」)。

この文では、彼の逃亡について3例を挙げています。

まず天安門事件後、仲間とともに雲南の国境から逃亡し、ミャンマー境域に入ったにもかかわらず、国内に送還された(本文に詳述)。5年を経て出獄後、綿陽の事件の時は東北のロシア国境へ赴き、現地のヤクザ組織に金を払って荷箱に隠れた。しかし、その箱は内モンゴルの赤峰に運ばれるという話を耳にして脱出した。その後、深圳に南下して、香港に抜けようとして失敗(本文に詳述)。まだ他に3、4回の密出国を試みたが、ことごとく失敗したという。この失敗例を読むと、廖亦武が密出国の幫助を依頼したはずはないという感想を持つ。これほど失敗している者に、脱出の相談を持ちかける人はいないだろう。

廖亦武は、李必豊が自分の脱出幫助の嫌疑で逮捕されたことにショックを受け、2012年11月25日づいで、彼の釈放を求める上記の呼びかけをネット上に掲出している。発起人は、彼のほか、艾未未、哈金(ボストン在住の作家)、ヘルタ・ミュラー(Herta Müller、ノーベル賞作家、ベルリン在住)である。艾未未は、2013年7月29日に李必豊の詩を朗読した動画をネット上に発表している。これについて、牧陽一が詳しく紹介し、朗読された詩の翻訳もおこなっている(牧陽一「誰が私の名前を消したのか?—艾未

未アイ・ウェイウェイ 2014『埼玉大学紀要(教養学部)』第50巻第1号 2014年、149~166頁)。

李必豊は獄中でも執筆活動を止めなかった。廖亦武は、彼が二度目の投獄からまだ二、三日という時の取り調べの合間に、「蚊は誰が発明した武器なのか？」などと考えていることに驚き呆れている。それは彼の監獄日記の一節で、次のようである。「1998年6月12日、晴、「蚊という兵器」。蚊は誰が発明した兵器なのか。ここで私は、蚊の襲来を生まれてこのかた最も多く受けている。遮るものない手足、防ぐものが何もない監房、ほしいままに飛び交う蚊に、私たちは頭を抱える鼠にさせられるが、何の防ぐ力もない。蚊が私たちの血を吸うのが好きなのか、それとも私たちが蚊にそうさせたいのか、別のある力が蚊に対する反撃をさせないようにしているのか。これら一連の問題は、監獄ができた上古のある日以来、囚人に取り上げられてきた。この問題に誰が回答し解決するのか。身を囹圄におとした囚徒として、脳みそに支障がない者なら、この問題を取り上げるのは白痴だと誰でもわかっている。なぜなら囚人には、自分の保護を求めようとする権利は根本的にないからである。たとえちっぽけな蚊の一匹ですら、囚人には如何ともしがたいのだ」(『六四・我的証詞』434頁にも載せるが、年次が明示されていない)。

『六四・我的証詞』には5頁にわたって李必豊の文章が紹介されている(諸ルートで獄中から持ち出されたもの)ほか、彼の小説『天空的翅膀』(孟煌イラスト、廖亦武はしがき、Rudi Publishing House、2018年7月、本文中国語)が出版されている。また、「新唐人」2013年6月4日の報道では、トロントでの六四記念活動で李必豊釈放を呼びかける映像が流され、そこには彼の息子の訴えも登場する(<https://www.youtube.com/watch?v=gQ-WE7fo5U>)。

武文建

武文建は労働者家庭の出身で、本人も燕山石化に勤める労働者だった。燕山石化の労働者は、広場の学生リーダーたちに協力を申し入れ、広場の秩序維持にあたる人員を出したが、武文建はそのメッセンジャーとなった。ある機会に、広場で学生や一般市民の愛国と民主のための自発的行動を目撃して感動

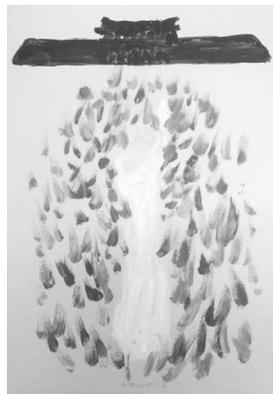
し、六四当日早朝、その人々を心配して広場に駆けつけ、銃撃の現場に行き当たった。彼は目撃したシーンを次のように語っている。

「バスは天橋で停まり、そこで降りて、通りに沿って天安門まで歩いた。地面は一面血だまりが広がっていた。僕の一枚の絵はその時の情景、血だまり、一つの円を描いたものだ……通ることはできたが、乱れていた。そこここに血だまりや破片などがあり、銃声がまばらに聞こえた」。

そして、多くの証言や当時の映像でよく見られるように、市民による救命活動に彼も参加した。

「すでに古い北京駅の脇の横丁に逃げ込んでいた。兵士が回れ右して戻っていくのを見届けるとすぐ、腹ばいになって隙間から覗いた。たかだか50メートルほどの距離だ。人を叩き殺しているのがはっきり見えた。その後、兵士たちは撤退したので、僕と駅構内に身を隠していた何人かがようやく救護に行けた。僕はその人の頭を抱え、他の人と共にその長い横丁を通り抜け、眼科のある同仁医院に直接送り届けた……その時はまだ息があったが、頭がすでに変形していた。そこから大きな塊が出ていた……頭部はすでに頭ではなくなっていた……彼を抱えて走りながら「どこの人？」と尋ねると、彼は「首都鋼鉄だ」と応じた。その後、三輪荷車を借り、道をまっしぐらに突っ走り、同仁医院に入った。入って通路を見ると、あたりは横たわる負傷者でいっぱいだった。白衣一面に血がついた看護師二人に彼を引き渡した」。

彼は後年、この広場の光景を絵画作品に創作する。これが画家としての武文建の出発点であり、この記憶に拘ることが、彼の人生における創作の道となった。



武文建作品

広場の光景を目にした彼は、帰宅後にTシャツを捜して、毛筆で「民主を返せ!自由を返せ!」と書き、背中にも孫中山の名言「革命なお未だ成らず、同志よって須べからく努力すべし」と書き、

このTシャツを着て燕山石化の工場内を歩き回り、人に出会えば市内の状況を話し、人々に推されてトラックの上で演説をした。これが原因となって逮捕される。

彼は獄中で多くの「六四暴徒」と呼ばれる人々と知り合い、絵画創作とは別に、もう一つの道を見いだした。こうした六四暴徒は、六四エリート学生と違って、始めから終わりまで無視されていることに気がついたのである。彼は言う、「国内外の六四エリートは、ここ数年でおそらく数万篇の文章を書いたことだろう——僕は毎年その何篇かを読むが、こうした「暴徒」のために書いた文字は一語もない。まるでこれらの人々が全く存在したこともないかのようだ。まるで六四事件は、天安門だけで起こり、そこだけが世界の人々の眼を釘付けにしており、その他の所で発生したことは、日一日とすべて忘れられていっているようだ」と。この問題意識を廖亦武も共有しているがゆえに、本書のような「六四暴徒」に対するインタビューを企図し、武文建はそれに協力したわけである。

また、彼のこうした意見は、日本人にも完全にあってはまるだろう（もっとも日本人は事件そのものすら忘れていた）。中国当局が「六四暴徒」とする大衆は、天安門広場の民主運動の主体であったのであり、彼らの事実に対する認識ぬきに、天安門事件を語ることはできないだろう。この点を実際の語りによって主張している点に、本書の意義の一つがあるとも言える。

さらに武文建は、この問題意識を自分でも実践している。リスクを冒しながら、この問題意識による文章を少なからず発表している。例えば、インターネット上には武文建の『六四死難者英雄譜』という文章が掲出されている。これは、六四当時の真相と48人の死者の記録である。その序言「六四「暴徒」への関心、彼らに栄光ある位置を返せ」は次のように主張している。

「あれから二十年になった。国内外の民主エリートたちは、意識的・無意識的を問わず、六四「暴徒」の群衆を無視している。そう、これら「暴徒」たちの教養レベルは高くないから、書くことも語ることもできず、まして何らかの「和解」を弄して、実際

には死刑執行人に引き続き跪き続ける、ということもできない。これら「暴徒」たちは、「暴力反対」を叫ぶのにコストを持ち出して話をするような「文明的な」学説など語れない。しかし当時、死刑執行人がデタラメな殺人の手を下した時、北京市民と「暴徒」たちこそが、人間性の中で最も尊い誠意をもって、生命と熱い血で暴力反対の神聖なる歌声を上げたのだ。試みに尋ねたい、当時の人類のどんな人々が、彼らより愛すべきであったらうか？ 六四虐殺後、全国で捕り物が大いにおこなわれ、六四で刑罰を受けた人々も多く出た。あれから二十年になった。これらの人々は刑罰をやっとの思いで過ごした後、今度は貧困という生存の苦難に遭っている。六四は、亡くなった人はもちろん、刑罰を受けた人々の払った代価が大きすぎるばかりか、彼らの苦難は今も続いている。六四の道義的な資源は、大部分、「暴徒」たちと刑罰を受けた人々が青春の代価をもって引き替えにしたものだ。あれから二十年になった。誰が六四の道義的資源を消費したのか？ あれら六四によってグリーンカードを得た8万人（劉賓雁によれば10万を下らない）は、いったいどこへ行ったのか？

私はこれらの人々に大きな声でこう言いたい。あなた方こそ、最も六四によって刑罰を受けた人々に関心を持つべきだ。この人々は、共産党と民主化運動の双方に捨てられた群衆なのだ。どうかあなた方の良心を発揮してほしい！」

武文建の大量の文章や絵画作品がネット上に公開されているだけでなく、「六四 全民抗暴」という動画も見ることができる。https://www.youtube.com/watch?v=HY_BDo630w0

李海

彼は、北京大学の六四学生リーダーの一人で、六四当日の北京市街の惨状を目撃した。その後、六四記念行動を行なって逮捕された。六四に拘りつづける信念の人である。それとともに、六四に拘り続けることが中国国内ではいかに困難かも痛感させられる。

李海の話によれば、彼は1992年頃に、在米の中国民主化組織「中国人権」の劉青と知り合い、全国各地の六四被害者家族に海外の義援金を送る役割を

担った。もちろん、この事業にはリスクがあることを彼は知っていた。数年間で、六百以上の被害者家族に支援金を直接渡し、合計十萬ドル以上になったというが、各人に分けると大した金額にはならず、せいぜい数百ドルであろう。しかし、そのためにその後には逮捕され、長期の懲役刑となった。

劉青は、1979年の「民主の壁」の地下出版と民衆組織を統轄した「連席会議」の責任者で、主要な運動に参加・指導し、『探索』代表だった魏京生の救援活動をしたかどで拘留された。1991年に出獄後、中国政府はアメリカとの外交カードとして民主活動家の釈放・出国を使い、彼は1992年7月14日に出国した。もちろんすぐに帰国はできない。アメリカ到着後ほとんどなくして、「在中國的一个寂靜角落」と題した獄中記を『北京之春』に連載した。これを日本語に翻訳して『チャイナ・プリズン』（凱風社、1997年5月）と題して出版した。是永駿は、1991年3月に北京の芒克の家で劉青と会ったと言っている。劉青は1990年11月30日以降も陝西省勉県拘留所に拘留されていたから、是永駿が北京で会ったのは、本当に出所直後だったのだ。外国人でも会えたのだから、李海が劉青に会ったのは、おそらく北京で、1992年の上半期だったのだろう。劉青は、六四当時は獄中にいたのであり、六四被害者と特別な関係ではないから、アメリカへ移ってから、人権活動の一環で六四被害者を経済的に救済する活動をおこない、それを李海に依頼したのだと思われる。

このインタビューでは言及されていないが、劉青によれば、1993年10月下旬、武漢の秦永敏が『和平憲章』を起草した時、李海は協力し、署名人の一人となった。『和平憲章』は、中国政府が国連常任理事国の一国として、人権に関する国連の決定を遵守する義務があることに基づき、個人の人権を守り、言論や結社の自由を実行し、政治犯の釈放を求める

などを10項目にまとめた憲章である。李海のほか、周国強、劉念春が起草に協力した。11月14日に、李海、周国強、劉念春、宋書元、沙裕光、陳旅、錢玉民、楊周らが、北京で『和平憲章』を公布した。これは、中華人民共和国成立以来、初めての民主運動の綱領的な憲章であり、後の劉曉波らによる『零八憲章』の先駆となった。そこでは、民主と法制の推進はもちろん、六四の政治犯の釈放や労働教養制度の廃止を訴えている。このため、彼は当時、何度も当局から聴取や拘留を受けていたのである。

1995年に裁判所が示した李海の犯罪とは、李海が1993年以来、六四で犯罪活動をおこなって処罰された人員の姓名・年齢・家庭状況・住所・罪名・刑期・収容場所・収容状況などを調査収集したことだという（以上、劉青の説明を参照、<https://www.chinesepen.org/blog/archives/43304>）。

裁判で判決を受けた人々について調査収集したことが、なぜ犯罪活動に相当するのか理解できないが、とにかく彼は六四「暴徒」の基本事実を目を向けて、それを表に出そうとしていたがゆえに刑罰を受けたのである。ネット上では「博訊」に彼の文集がある。https://blog.boxun.com/my-cgi/post/display_all.cgi?cat=lihai



李海（大紀元）

以上、今のところわずかに4名について補説をおこなった。今後、もっと多くの人々の個人史とその社会的背景および現状について認識を進めるべきだろう。 ☆

今後の研究会予定

6月例会

6月27日(木) 午後7時～ 専修大学神田校舎12階 社会科学研究所
前田年昭「下放史からみた紅衛兵運動の総括」

お詫びと訂正

前号奥付、第13号（通巻第19号）は第13号（通巻第20号）の誤りです。お詫びして訂正します。（編集部）

歳出し批評

日本における東洋史学の伝統（下）

旗田巍^{たかし} 解題 前田年昭

〔前号からのつづき〕

思想と学問との分離について意識的に努力し、そこから多くの業績を生みだしたのは加藤繁博士である。博士が中国経済史の研究の開拓者であり、大きな足跡を残したことは、周知のとおりである。その学風は文献の忠実な解釈を主体とする考証学であって、池内博士の論理追求の学風とは全くちがっていた。しかし思想と学問^{マツ}と関係においては共通なものがあった。加藤博士においては、学問が思想からきり離されていたというだけのものではなく、自己の学問が自己の思想から意識的に切りはなされていた。その点では東洋史学の特色を最もよく示したものと思う。博士は極めて学に忠実な方であったが、他方において蓑田胸喜の思想の共鳴者であった。彼は大正・昭和にかけて敗戦にいたるまで右翼の思想活動をやり、社会主義的傾向のあるものは勿論、自由主義的な学者・文化人・政治家にまでかみつき、こういう人々を告発し、大変な害毒を流した人物である。加藤博士はこの蓑田胸喜の思想に共鳴し、かれが主宰した「原理日本」に投稿し、「絶対の忠誠」（1932年）を著わした。博士の思想は徹底した忠君愛国主義であった。ところが、こういう思想をもっていたにもかかわらず、博士の研究はすべて考証学であって、その研究のなかには博士の思想の片鱗もうかがえない。その点は平泉博士が研究そのもののなかで主義主張を明確に示したのとは対照的である。そして加藤博士の業績がいまも尊重されるのは、その研究が思想と切りはなされていたからである。

加藤博士は思想を排除すべきことを主張した。「吾等は努力して成るべく主題を混ぶることを少きやうにし、又主観の確実性に富み客観的事実に成るべく近きやうに努力するを要す。即ち主観は已むを得ずして之を許すものにして、主義としては飽くまで客観的なるを尚ふなり」と述べている（『中国経済史の開拓』21頁）。ここでいう主観とは、「理論・学

説……政治上の主義・宗教上のドグマ」（同書 20頁）などの一切の思想的なものを意味する^{★4}）。博士は外からくる思想を排しただけでなく、自分自身の思想をも排した。そこに初めて博士の学問が成立したのである。もしも博士の思想が研究に導入されていたら、今日みるような尊重すべき業績は残らなかったであろう^{★5}）。

加藤博士は極端な例である。しかし、こういう傾向は従来の東洋史学において一般的であった。これが東洋史学の純粋性を保つ重要な道と考えられた。そして、それは事実において、半ば当たっていた。

しかし学問を現実・思想と切りはなしたことは、往々にして学問と現実の奇妙な結合を生んだ。戦争中に東洋史家も動員され、戦争の意義やアジアの未来などについて相当に発言した。いまからみると滑らかな発言が多い。注意すべきことに東洋史家で発言したものの大多数が、研究者としての立場で、自己の研究の内部からでた言葉をもって発言していないことである。もっとも津田博士のように、研究自体から生れた発言をした人もいるが（「支那思想と日本」は中国支配方法に関する日本の反省を求めたものとして注目される）、概して思いつきを述べたにすぎない。現実からはなれることを目標にして研究したものが、時局について意見がでる筈はない。無理にだすと思いつきになり、時局便乗になる。こういう事例が少なくなかった。

もしも研究の内部からでた発言であれば、戦後その発言のい誤りがわかったときには、その発言を取り消すだけではすまず、その発言を生みだした自己の学問自体についての反省がおこる筈である。それが戦争に対する研究者の責任のとり方である。しかし単なる思いつきの発言であった場合には、それだけを取り消せばよく、研究には何の影響も及ぼさない。戦争責任を研究の内面で考えることにはならない。現実と研究との分離、両者の機械的結合から

は、研究自体への反省は生れない。

現実をはなれ、思想をすてることによって、日本の東洋史学は侵略体制のなかで学問の純粹性を守ろうとした。それはそれなりに相当大きな成果をあげてきた。しかし他方において、現実との無責任な結合、権力への追随をもたらし危険性を多分にもっていた。それだけではなく、その成果には大きな制約があった。これまで日本の伝統的東洋史学がおさめた成果は個々の事実に関する考証が主であって、アジアの歴史の体系的把握の点では著しく不十分であった。それは単に研究水準がひくくて個別研究におわれ、体系的把握をする段階にまで到達していなかったからではない。体系的把握そのものを軽視する傾向があったからである。中国経済史の研究に大きな業績をあげた加藤博士は、「史家の任務は何よりも個々の事実を研究して、その真実を闡明するに在り」というランケの説に賛成し、個別と全体との関係については、つぎのように述べている。

「或る一つの事柄を理解するには、それと全体との関係を知ることを要す。従って全体に対する理解無かるべからず。是に於て吾等は吾等の有する知識を集めて仮に全体に対する理解を造りあげ、之を利用して或る特殊事項の研究を行うこととなる。此の全体の理解は畢竟一種の主観なり」(「中国経済史の開拓」20～21頁)。

博士においては、個々の事実の認識が主たる目的であって、全体の認識は個別認識を助ける手段にすぎない。しかも全体の認識は一種の主観にすぎない。主観が博士にとって好ましくなく、やむをえず導入するものであることは、前に述べたとおりである。

歴史の体系的認識のためには、何等かの思想的なものへの介入は不可避であろう。それを避けるためには、結局体系的認識をあきらめ、個別的事実の考証に研究を限らざるを得ない。博士はそのことを知った上で、こういうことを言ったと思う。実際、博士の研究によっては中国経済史の体系的あるいは法則的認識は得られない。ひたすら個々の事実の考証が行なわれ、そこに博士の本領がみられる。こういう傾向は博士だけのものではなく、伝統的東洋史学の一

般的傾向であった。

一体、現実をはなれ思想をすてるのが学問の純粹性・主体性を守り、学問の内容を高める道であるのか。逆に現実に目を注ぎ思想と学問とを統一することが、より正しい方法であるのか。ここに問題があると思う。

2 アジアへの優越感と近代主義

日本の東洋史学は個々の事実の研究に力をそそぎ、その面では大きな成果をあげた。しかし総体的結果において大きな欠陥を示したといわねばならない。アジアの展望について明らかに見とおしを誤ったからである。戦後展開されているアジア諸民族の解放運動について、われわれは予見する力を欠いていた。今にして思うと、その動きは早くからあったが、それに気づかなかつた。それは単に史料の不足や現代史・近代史研究者の不足というだけでは片付かぬ問題であり、アジアの歴史を見る目に重大な欠陥があったためだと思う。思想をすて何のものにもとらわれぬと考えていた研究者が、実は無意識のうちに偏した観念にとらわれていたためではないかと思う。

元来、日本の東洋史学とくに東京帝国大学を中心として成長した東洋史学は、ヨーロッパ史学の大きな影響をうけて成立し発展した。東洋史学の創立者であった白鳥博士は、東大の史学科の出身であるが(1890年卒業)、当時の史学科は専ら西洋史を教える学科であった。白鳥博士とならんで東洋史学の創立に努力した那珂通世博士は福沢諭吉の門人であった。白鳥博士のあとをうけて東大東洋史学を主宰した箭内博士および池内博士も、ともに東大史学科の出身であった。これらの西洋史学を学んだ人々が東洋史学の開拓発展に活動した(その点は、京都大学を中心とする東洋史学の開拓者の内藤湖南博士が漢学出身であったのと対照的である。この派は支那学派といわれた)。かつて江戸時代から明治前期にかけて、中国を研究したのは漢学であったが、東洋史学は漢学の系統からおこったのではなく、ヨーロッパ史学の系統から生まれでた。

白鳥博士は東大史学科でドイツ人リースの教えをうけた。リースはランケの弟子である。リースを通

じてランケ史学を学んだのである。博士は卒業後もたえずランケの著作を読んだという。当時、漢学が権威をもっていたが、博士はそれを勉強せず、清朝考証学をはじめ中国の学者の研究には関心が乏しかった。博士の関心はヨーロッパ学界であり、西洋から学び、西洋を追いこすのを目標としていた。こういう態度は博士の一生を通じて変らなかつた。

その博士が東洋史の研究に向つたのは、東大を卒業して学習院に奉職し、学習院長三浦梧楼のすすめによつた。三浦梧楼は大陸発展に関心の深い軍人で、のちに朝鮮公使となり閔妃暗殺事件で活躍した人物である。この人のすすめで学習院で東洋諸国史の講義をすることになり、東洋史研究を始めた。当時、朝鮮問題が朝野の関心を集めていた。博士は東洋史研究の第一歩として朝鮮史研究を始めた。そののち研究分野を朝鮮から満洲・蒙古・西域へと拡大し、東洋史学を開拓した^{★6}。

博士の東洋史学の開拓の上で忘れてならないのは漢学とのたたかいである。1909年、すなわち満鉄に朝鮮地理歴史調査室を設立した翌年、東大の支那史学科が東洋史学科と改称される前年、博士は「支那古伝説の研究」(東洋時報 131号)を発表し、漢学者が崇拜してきた堯・舜・禹という聖人が実在した人物でなく、後世につくられた架空の人物であることを論証した。これは「堯舜禹抹殺論」といわれ、学界とくに漢学者に異常なショックを与えた。漢学者の側から猛烈な反論がおこつた。その代表選手は林泰輔博士であつた(その反論は「支那上代之研究」1927年という著作集に収録されている)。両者の論争は大正初年までつづき、学界の注目をあびた。白鳥博士の説には不備な点もあつたが、堯舜禹が実在の人間でなかつたことは明らかになつた。中国研究において、新興東洋史学は漢学に勝利をおさめ、その地位を確立した^{★7}。

漢学批判、漢学者が崇拜していた聖人や経典に対する批判は、白鳥博士ののちにも東洋史研究者にうつけつがれた。その代表的学者は津田博士である。博士によつて中国古典は徹底的に批判され、さらに中国古典にあらわれた思想の不合理性が指摘された。

東洋史学の先達者によつて長年のあいだ信奉されていた儒教の偶像がこわされた。東洋史家が身につ

けていたヨーロッパ的合理主義の立場からみると、かかるものは打破さるべき不合理なものであつた。偶像破壊は、当然の正しいことであつた。しかし、その跡に一体何が残つたであろうか。そこに問題がある。

元来、合理的精神は古い偶像やドグマを打破すると同時に、その下にかくされていた事実を発見する点に大きな意義があると思う。白鳥博士の偶像破壊は、中国古代史の再発見を伴うべきものであつた。ところが、そういう努力は、白鳥博士によつてなされなかつた。その後継者によつても十分にはなされなかつた。すでに明治末年には甲骨文学^(マオ)や金石文の研究が中国学界で始つており、そこには中国古代史を再発見すべき鍵があつた。しかし白鳥博士をはじめ、東洋史家はこういうものには手をつけなかつた。興味があるのは、白鳥博士との論争に敗れた林博士がこの方面の研究に熱意を示したことである(前掲「支那上代之研究」に収録)。東洋史学界では甲骨文学^(マオ)の真偽を疑う風潮さえあつた。

こういう形の偶像破壊は、それまで尊敬されていた中国文明に対する不信心、偶像をつくりだした中国人に対する蔑視感をひきおこす。同時に中国に対する優越感をひきおこす。漢学者は中国の現状については否定的考えをもつたが、古文明については敬愛の念を抱いていた。東洋史学はそういうものまで否定してしまつた。一体、東洋史研究者とくに東京の東洋史家のなかには、中国文明について愛着をもつものが極めて少なかつた。中国批判者はいたが中国愛好者は乏しかつた。ある国のことを研究すると、その国が好ましくなるのが自然であるが、東洋史家にはそういう傾向は乏しかつた。中国はおくれた国であり、その文明は不合理なものである、というのが、東洋史研究者がもつていた一般的観念であつた。そして中国を研究すればするほど、中国の欠点だけがはつきりする、という傾向があつた。進歩的立場に立つと思つていたものも、発展段階論の機械的適用で同様の傾向におちいつた。意識的あるいは無意識的に、中国および中国人に対する蔑視感・優越感をもつていた。中国だけでなく、アジア全体について、同様の考えをもつていた。

こういう優越感が育つた基礎には日本の大陸発展

があったが、その重要な思想的側面を形成したのは近代主義であったと思う。東洋史学はヨーロッパ史学の系譜のうちで成立し、ヨーロッパ文明を基準にして歴史を考える傾向を多分にもっていた。合理的・実証的史学の基準にはヨーロッパの近代主義があった。漢学批判、中国への優越感、アジア蔑視感の背後には、この考え方があった。その点を最も明白に示したのは津田博士であろう。博士は戦争中に「支那思想と日本」をあらわし、中国文明を批判し、中国文明に対する日本人の考え方を批判し、中国に対する日本の指導の方法を論評した。その要旨は次の通りである。

日本と中国とは異質の文化をもつ国であり、同文同種というのは誤りで、両者を含めた東洋文化というものには存在しない。したがって東洋文化の尊重などといって中国を指導するのは見当ちがいである。いまの日本は「世界性のある現代文化」をもち、「その根本となる現代科学」と科学的精神を身につけ、アジアの先進国である。中国は日本と正反対で現代文化をもたず、世界から取り残されている。したがって「今日では日本が中国から学ぶべきものは何もない」。日本は世界性のある現代文化をもって、おくれた中国を指導すべきである。

以上が博士の意見の要旨である。そのうち東洋文化なるものの否定は、東洋主義をかざして中国侵略を鼓吹していたものに対する手きびしい批判であり、大きな意味があった。しかし博士は日本の中国侵略に反対したのではない。世界性のある現代文化によって、もっと合理的に中国を指導すべきであると主張した。問題は、その世界性のある現代文化である。

博士がいう現代文化とは、西洋から学んだ近代的・市民的文化である。博士は「今日の日本があらゆる点でいわゆる西洋に源を発した現代の世界文化、その特色からいうと科学文化とも称すべきもの、を領略し、民族生活の全体がそれによって営まれていることは、いうまでもない」(178～9頁)と述べている。まさに西洋的近代主義である。この視点から中国文

明を批判し、また中国文明に対する日本人の考え方を批判している。博士の中国研究の全体を貫くものは、この近代主義であった。中国の古典に対する批判も漢学に対する批判も、すべてこの立場で行なわれた。

この近代主義の立場からみると、中国は度しがたい後進・未開の国である。日本と中国とをくらべると、日本にも批判されるべき古いものが沢山あるが、日本のほうが中国よりもずっと近代化している。したがって日本は中国から学ぶべきものは何もない、ということになる。同時に、日本が中国を指導すべきである、ということになる。

こういう考え方は、実は明治以来の日本の知識層とくに進歩的知識人がもっていたものと共通している。たとえば山路愛山は、日本内部の不合理的なものを批判しながらも、一たび中国のことを論ずる場合になると、中国に対する異常な優越感を示した(山路愛山「日漢文明異同論」)。

近代主義の立場は津田博士においては明白に露呈されている。他の多くの東洋史家は、これほど明白には示していない。自己をつきつめることをやめ、ここまで行きつく手前で考証的研究に埋没したからである。しかし津田博士ほど意識してはいなかったにせよ、同様の考えをもっていたことは否定できないと思う。

今日において、この考え方の限界は明白である。この考えではアジア諸民族の解放という大きな事実をつかみようがない。中国革命の前提であった労働運動・農民運動・学生運動などは、この考え方からは単なる暴力的運動とみられた。したがって、歴史研究の重要な対象にはならなかった。近代主義の立場からは、批判・否定されるべき古くおくれた面はとらえられたが、古いものと同時に近代をも乗り越えて進もうとする新しいエネルギーは把握されなかった。そこに大きな限界があった^{★8})。

思想をすて何のものにもとらわれぬ公平無至の立場にたつと思っていたものが、実はこういう立場にたっていた。実証主義・考証主義といっても、実は一切の思想から解放されていたのではない。無意識のうちに思想をもっていたのである。

むすび

かつて日本のアジア研究は侵略的研究体制のなかで行なわれた。研究者は現実から目をそらし思想をすてることによって、学問の自主性・純粋性を守ろうとした。それはそれなりに相当大きな成果をあげた。しかし、そういう方向は、研究を個々の事実の考証に限定し、歴史の体系的認識を放棄させただけでなく、権力との無責任な結合をもたらした。しかも思想をすてることは実際には不可能であって、何ものにもとらわれぬと思っていたものが、実は近代主義の立場にたち、そこからアジアを眺めていた。そのためにアジアの変革・アジア諸民族の解放という重大な歴史的事実を認識することができなかった。日本の東洋史学は過去において大きな業績を示したが、こういう限界・欠陥をもっていた。

戦後、東洋史学は大きな転換をとげつつある。現実への注視、思想と学問との統一、歴史の体系的認識など、かつての東洋史学にはみられなかった研究方向があらわれている。その基盤にはアジアの解放に対する共鳴がある。いまやアジアの歴史は従来とは異なる立場から再認識されつつある。

アジア・フォード両財団の資金提供による中国研究は、かつての研究体制を復活させるおそれはないか。かつての東洋史学がもっていた限界・欠陥——今もその伝統は批判されないままで多分に残っている——を固定化するおそれはないか。新たに成長してきた研究方向を阻害するおそれはないか。東洋史学の内部から考えると、このような諸点が問題になると思う。資金提供の問題が多数の研究者の関心をよび、熱心に討議されていること自体に、私は時代の転換を感じ、大きな意義を認めるが、この機会に東洋史学の伝統的性格の内部に立ちいった検討を望みたい。

[附記] 東洋史学の伝統については、もっと多くの問題が残っている。とくに京都の内藤史学については大きな問題がある。それらの点については私の準備不足のため論及しえなかった。他日改めて検討しようと思う。

- (4) 加藤博士が最も熱心に排撃したのは唯物史観であった。博士は唯物史観について「科学的というも実は主観的独断説感情論なり。決して冷静なる科学に非ず。……人を迷す手品を使う。手品の種は弁証法。弁証法以外何の証拠も証明も無し」といっている（『中国経済史の開拓』20頁）
- (5) 加藤博士は理論・学説などを主観として排斥したが、自身は精神史観ともいうべきものを主張した。「国家社会を維持発達せしむるものも、亦主として之を組成するところの国民の精神の力にして、治乱興廃、文化の盛衰、富の増減等、亦主として国民の精神力に基づくと見るべしと為す。……社会の原動力、歴史の原動力は主として人の精神力なりといはざるべからず」（同上書 55頁）「経済史は人が物を動かす歴史で、それを推進する根本的な力は、畢竟精神に外ならぬことを痛感した。あらゆる歴史は、窮極に於いて精神史であることは、私の研究の帰着である」（同上書 12頁）。こういう精神史観をとえながら、それが博士の経済史研究のなかには顔をだしていない。この精神史観は、博士においては、研究とは離れた政治に結びついたらしい。博士の立場からすると、精神史観で研究すること自体が誤りである。
- (6) 白鳥博士の学歴・学風については、註（1）にあげた津田・和田両氏の論述、(2)の石田氏の説明、および橋本増吉「先秦時代史」（歴史教育 9 の 7 「明治以後における歴史学の発達」）に記されている。
- (7) “堯舜禹桀殺論争”の学界における反響については、上記の橋本氏の論文に詳説されている。
- (8) 津田博士は前掲の「白鳥博士小伝」において、白鳥博士の一生をかえりみて「幸福の時代における幸福の生であった」といっている。それは「国史の上に未だ會てそのためしない国運の興隆、世界の歴史にたくひの無い民族生活・民族文化のめざましい発展を、短日月の間に、経過して来た明治・大正・昭和の今年に至る聖代に生を享けたことの幸福」であり、また「断えざる国運の進展を我が身のこととして体験しつつ、みづからもまた、その進展の一つの力として、それに参与しそのためにはたらいてゆかうとする、明るい希望」をもったことである。明治・大正・昭和の国運の発展とは、日本の近代化であり、軍国主義日本の成長である。日本の発展のかけに、アジア諸民族の苦しみ、解放への努力があったが、それには何の配慮も払われていない。白鳥博士は、まさに「幸福な時代に於ける幸福の生」をおくった人であったが、津田博士がこのようにいうことのなかに、近代の歴史に対する津田博士の考え方がうかがわれる。こういう立場からは中国革命の動きはとらえようがなかった。津田博士は、中国の変革を、ただ西洋化への萌芽としてしかとらえ得なかった（『支那思想と日本』8～9頁）。津田博士以外の多くの東洋史家はそれさえできず、単なる排外暴動としか考えなかった。五・四運動についての評価は戦後の産物であって、敗戦前には、それを正しくとらえたものはなかった。

『歴史学研究』No.270、1962-11、pp.28-35]

王兵映画劄記（その1）

土屋昌明

『三姉妹』（2012年、フランス/香港、153分）

本作の成り立ちについて、王兵のトークによれば^①、2009年に友人の映画監督（Han Mei）と映画を交換するという企画で、中国西南部・雲南省の海拔3200メートルの山地、80戸の家がある洗羊塘村において短編を撮った^②。その後、フランスのテレビ局からドキュメンタリーの制作を依頼され、この子どもたちを撮ることで認められた。この依頼は自由度が高く、ストーリー性のある撮り方を認めてくれたため、とても興奮したという。「私はドキュメンタリーがメディアからニュース性を求められ、それによって制作に制限が生じることを嫌っていた」。それで2010年に『三姉妹』を撮った。

撮影方法について、同上のトークによると、王兵を含むカメラ2台で三姉妹を撮った。映画の153分のうち、130分は10日間で完成させた。起床から就寝まで2台のカメラでほとんど撮り続け、それぞれのカメラが撮った素材は、毎日8時間ほどあった。それを10日間で130分に編集した。映画のラスト20分は、王兵が高山病にかかって仕事できなくなったため、ほかの2人のカメラマンが前後6日間で撮り終えた。クランクインから完成まで約4ヶ月とのこと。

撮影の実際については、王兵はべつのトークでこう語っている^③。「できるだけ子供たちをじっくり観察するように心がけました。実際カメラの距離も、なるべく彼女たちの生活に邪魔にならないよう、遠くに置くようにしていたわけです。なるべく自然な状態で撮れるように彼女たちの生活に介入しないこと。それを心がけました」。「完全に透明になるというのはどうしても無理なので、なるべく生活に影響を与えないようにしましたが、結局その影響はもちろんありますよね。ですから透明ではありません。たとえば妹が泣くところがあります。2番目の妹が下の妹をぶったりして、下の妹が泣いてしまいます。でもそういう時にカメラがいるとカメラの方をちょっと見てしまうんですね。カメラがここで撮っているということを知ってちょっと笑ったりします。そし

て泣き止んだりするわけです。ですからカメラも彼女たちの生活の一部になっていっているわけですね。そういうわけで、私はカメラの存在を無理に消そうとは思いませんでした。それも生活の一部なのです。編集の時も、カメラの方を見ている時の表情を無理に消してしまうようなことはしませんでした」。

叙述方法について、王兵は自身のこの作品を気に入っているという^④。その理由は、一つには王兵自身の創作史で新たな境地を開いた点にあるようだ。『鉄西区』という長編ドキュメンタリーを撮り、『鳳鳴』という3時間の口述の物語りを撮ったあと、『無言歌』というドラマを撮った。つまり『三姉妹』はドラマからドキュメンタリーに立ち戻った作品である。「このプロセスで自分の撮影方法を調整した。つまり『鉄西区』とまったく異なる、ストーリーと人物を組み合わせるような方法で撮影した」。「時間を撮り、人物とドキュメンタリーのあいだに叙述の可能性をさぐろうとした」という。つまり、映画の単純性、ストーリーの単純性を模索してきたが、ストーリーを展開させるにあたり、事前に完成され設計されたストーリーではなく、撮影する中から模索し発見するようにし、それをもって映画の物語と叙述の論理を調整させようとした^⑤。現代の映画の特徴は、物語を制限されない方向に発展していることだ。監督たちはみな、自分独自の方法で映画叙述の可能性をさぐっている。シナリオにそった創作は映画に限界をもたらす。シナリオを作った段階では、この物語には何の意味もない。この物語はいままでにあった映画経験から学ばれたものだからだ。「映画が撮影において、それまでにあった物語に仕えること、うまく考えられた物語に仕えることを私はいやだと思う。映画の生命力というものは、私たちがすでに知っている物語に奉仕することにあるのではなく、映画が撮影しているときにある物語をさがし、発見し、ある物語を創造できることにある。この物語は過去の経験に制限されるものではなく、映画の叙述論理に制限されるものでもない」。このような叙述方法を『三姉妹』で実行できたのであろう。自分の映画スタイルとの対話、自己との対話を模索できた作品だからこそ気に入ってい

るわけである。

この村の生活を撮った動機については、村の生活が王兵自身の幼少期の貧困を思い出させたという^⑥。こどもが動物のように生きる非人間的な世界だが、とても人間的な絆があり、それが人生に対処する力を与えている。「私は、現代の中国におけるこうした貧しい農村の子供たちの現実を証言したいと思いました。現代というイメージ、経済発展というイメージ、そして、今日の中国が見せているほとんど西洋世界とっていいイメージは、ゆっくりと私たちの視界から、向こう側——人間の側——を見えないものにしていきます。この点では、本作に経済大国となった中国への批判を読み取ることもできる^⑦。しかし王兵は、「人間の側」、現実のより具体的で直接的なイメージと、彼らの世界の直接的なイメージを観客に投げかけるために、三姉妹のあいだで毎日繰り返されている日々の時間や細かな事柄のすべてを記録したのである。

注

- ① Jihlava International Documentary Film Festival (2014) における王兵のトーク。https://www.youtube.com/watch?v=niw8JYL7i38
- ② 王兵作品『喜洋塘』(18分) のことであろう。これは、バルセロナ現代文化センターのためにつくられた『Happy Valley』(18分) と同一と思われる。本作では、三姉妹とはべつの子供二人の馬の牧畜、表情、高原の風景とそこでの馬の様子、村人たち、テレビの大音量のなかで犬やブタの餌、レンガのようにかたまつた糞などを運び貯蔵するようす、家族でいもを焼いて食べ、大人がタバコを一服するようす、暗い部屋のなかでの三姉妹のようす(いもをむいたり、姉が妹をたたいたり、猛烈に泣いたり)、川縁で死んだように眠るこどものようすなどが記録されている。
(http://v.youku.com/v_show/id_XMzQxMjl2ODc2.html) 参照。
- ③ http://www.outsideintokyo.jp/j/interview/wangbing/index2.html
- ④ 注①に同じ。
- ⑤ 本作をめぐる、ドキュメンタリーのストーリー性について王兵はこうも述べている。「私は劇映画とドキュメンタリーの境界は非常に曖昧になってきていると感じています。劇映画を撮る際の問題点として一番大事なのは、それらが虚構であるにもかかわらず、あたかも真実であるかの如き物語を組み立ててみせるということです。これが一番難しいことですけども。一方、ドキュメンタリーは目の前にある事実を記録として撮っていくわけです。それが本当の意味で映画として成立するような、いい作品にするということ。ここがまた、ドキュメンタリーの最も困難な点であるわけですよ。つまり、その両方の要素を巧く混ぜ合わせる事が重要なのですが、それは編集の段階が大きく作用してくるのです。今回もそうでしたけども、ドキュメントではあるのですが、劇映画の物語的な手法を編集で取り入れていくということ。それが

重要です」

http://intro.ne.jp/contents/2013/05/11_1855.html

⑥ ムヴィオラの公式HP (http://www.moviola.jp/sanshimai/director.html) の監督メッセージ。

⑦ 「貧しい一家の原始的な生活ぶりに向けられた眼差しが、中国の好景気の幻影への鋭い反論となっている」。Jay Weissberg (2012年9月7日)。“Review: ‘Three Sisters’”. Variety.

『収容病棟』(2013年、香港・フランス・日本、237分)

本作は、雲南省西北部の昭通市にある精神病院の内部を撮っている。2013年1月3日に撮影を開始し、4月18日ころに撮り終わった。撮影はほぼ毎日、朝から夜までおこなわれた。

精神病院内を撮影できるのは、中国においてもまれなことだ。当初、王兵はみずから望んで撮影に入ったものの、「何故自分はこの精神病院で映画を撮るのか、一体ここで何を撮ればいいのかという大きな困惑」があった。それで、社会の目に晒されていない人々を自分が撮ることによって、珍しいもの、普通では見られないものを他の人に見せる、というような映画にならないように強く意識したという^①。

撮影について、前作『三姉妹～雲南の子』と変わったのは、撮る対象の人数が十数人と多く、その人達が閉ざされた環境で生活しているという点だけで、基本的な撮影のスタイルは変わっていないと王兵は述べている。「出来るだけ彼らの生活をじっと直視し、それをカメラに収め、そしてこの人達の内なる心の世界というものを覗こうとしました。出来るだけ生活の描写をきちんとするように撮っていったわけです」^②。カメラは1台を2人で使い、300時間程度撮り、音はシンクロで録音している。編集については、基本的に撮った素材は時間の順番を変えずに編集してあるとのこと。

カメラを回している以外の時間は、廊下に座って患者たちと話をすることも多かったという。「この映画を撮影するまでは、精神病院や患者の実態についてほとんど知らなかった。撮影に入って毎日患者たちと一緒に過ごす、一人ひとりの性格や病状が、少しずつ把握できるようになった。彼らが入ってきた理由、家庭環境もだんだん分かってきた」。「ある若い男性は“少し頑なで、他人とちょっと違う”という理由だけで収容されていた。そういう人たちを見ていると、自分たちもいつ同じよう

にこういう病院に閉じ込められるか分からないと思う」^③。

一人ひとりを撮るといふ姿勢から、個人のプライバシーを侵すようなシーンも登場する。たとえば、患者が室内で放尿するシーンを撮っているのなどは、倫理的な反感を抱かされるだろう。そのような問題はいかに考えたらよいのか。撮影対象との関係について、王兵は次のように述べている。「撮影する時はカメラを用いて相手と交流する、その方式しかないわけで、それは拒絶されたら止めざるを得ないし、無理に撮ろうとはしない。理解はしたいとは思いますが、そこを押してまで撮ろうという気はないのです。やはりこういうドキュメンタリーの撮影にとっては、信頼関係が一番重要ですので、それはとても大事にしています。なるべく撮る対象の生活を覗き見するような、盗撮するようなことはしたくない。そういうことではなくて、正常な関係をお互いに打ち立てて、そこで相手も分かってくれている上で撮影をするということ、そこが結局はいい関係に繋がって行って、信頼というものが成り立つわけですね……そういう関係が打ち立てられていれば観る人に不愉快な感じを齎さない、そこがとても重要です」^④。こうした王兵の考えが映像として実践されていると見ていいのだろうか。一つの意見としては、「カメラを前にして患者たちがなぜかくも「ありのまま」を曝すことができるのか、これは今でも私にとって理解できないままである。ワン・ピンが彼らの内面に立ち入ろうとしている訳でも、また、壮絶な物語を求めている訳でもなく、ただただ彼らの隣人として長時間寄り添っていたであろうことが推測されるだけである。ここに対象にカメラを向けるワン・ピンの監督としての倫理があるはずである」と比嘉徹徳が言うのもうなずける^⑤。対して、同じく精神患者を撮った想田和弘『精神』では、監督は被撮影者との意思疎通を徹底している。それにくらべて王兵監督の態度は、表面的に過ぎる感じもする。このあたりは議論のあるところだろう。

これはダイレクト・シネマの基本的問題ともいえる。ワイズマン監督『チチカット・フォーリーズ』との比較が問題となる。この点について、佐藤賢の次の指摘が参考になる。「フレデリック・ワイズマン的な「ダイレクト・シネマ」の文脈でワン・ピンが語られるのが一般的です。しかしワイズマンとも違ったものがワン・ピンにはあるのではないかと。一方、日本の小川紳介や土本典昭らのドキュメンタリー映画の文脈においては、撮るものと撮られるものの関係性に議論が収斂していきますよね。です

からワン・ピンと被写体との距離とか関係性に私たちの意識が向く。しかし私たちが考えるそうした文脈とは違うところにワン・ピンは位置しているという気がしてならないのです。例えば、撮られている人が撮られたがっているし、喋りたがっているようにも見えてしまう。また、被写体がカメラのほうに視線を向けるシーンもちょくちょく出てきますが、その視線がカメラを通過して、観客の私に刺さってくるのです。こちらが見られている。撮る側と撮られる側が反転している——そこがワン・ピンの映画を考えるとときにいつも謎としてあります」^⑥。

精神病棟を扱う点で、ワイズマンの作品はもちろん、映画『カッコーの巣の上で』（1975年）との関わりが指摘されている。小泉義之は、王兵は『カッコー……』を「意識していないはずはない」という。その一方で、『カッコー……』で描かれていたような、精神（科）病院からの解放が個人の解放と一致するはずであり、一致すべきであるとするようなヴィジョンを持っていないように見えるという。「王兵は、「収容病棟」に対する古くからの批判が意味を持たなくなった時代を写そうとしている」というのは、『カッコー……』のケン・キージー原作小説では、自発的入院患者も病院スタッフに加担して、施設内での自由を求める措置入院患者を窮地へ追い込み死なせる。この点が、原作と映画の決定的な違いとなっている。王兵はこの違いを知っているからこそ、「措置入院者だけを収容する病棟をその撮影場所として選ぶことによって、入退院の自発性を保証するだけでは決して解決のつかない問題、すなわち、かつては自由が保証するかに見えた解放を、もはや解放的な外部が存在しなくなってしまった世界において探し出すという問題に取り組もうとしたに違いない」。「外部への自由や内部での自由に代るものとして、愛が持ち出されている」^⑦。

しかし、王兵がそのような複雑な思想的段取りを経て本作を撮っているとも思えない。王兵は院内の人と人との関係についてこう述べている。「そこにはある種の愛がある。人が人に対して愛や関心を寄せる。その関係はすごく微妙なものですけど、非常に美しいと思います。この病院で暮らす人々の関係はとってもシンプルです。病院の外にいる、いわゆる“正常人”の方が、営利が絡んだり、利己的であったりして、人に対して同情を寄せることなく接したりする。収容者らの考え方や人間関係の方が、ずっとリアルでシンプルなんです」。病棟にいる人々に対する王兵の考えもシンプルと言えるだろう。映画監督の船橋淳は、理念的な解釈より上位に、中国の

社会問題のリアリティを置いて考えるべきだとする。「停滞こそこの作品のテーマであり、美学的存在論的なアプローチであり、ワン・ピンそのものに昇華された【世界】であるからだ。そしてなによりも重要なのは、映画の原理主義的な擁護以上に、中国の社会問題の深奥にある人々の存在が、この【世界】により克明にあぶり出されているということである。4時間という映画の尺がこれほど正当化された作品も希有だと賞賛したい」^⑧。

その「中国の社会問題の深奥にある人々の存在」に関わって、本作は、王兵の作品が基本的に志向している、権力による監禁と規律／訓練というフーコー『監獄の誕生』的問題を最も典型的に示していると言えるだろう。比嘉徹徳はこの点を鋭く指摘している。「閉鎖環境への監禁によって従順な身体を作り出すことが、近代の規律権力のあり方であった……しかし規律権力が監禁と同時に、時間の有効利用による技能習得やら知識獲得といった「発展」や「発達」をあくまで目指していたのに対して、このドキュメンタリーが描くこの病棟には、いかなる未来も指し示されない……ワン・ピンが映す人物たちは、誰もが閉じ込められている。現代中国の厳しい現実にカメラを向けることによって、何より、「人々はそのから動くことができない」ということをこの作家は執拗に描こうとしているのではないのか」^⑨。

注

① Outside in Tokyo 「ワン・ピン（王兵）『収容病棟』インタビュー」

<http://www.outsideintokyo.jp/j/interview/wangbing/index3.html>

② http://www.outsideintokyo.jp/j/interview/wangbing/3_02.html

③ <http://eiganomori.net/article/400423403.html>

④ http://www.outsideintokyo.jp/j/interview/wangbing/3_03.html

⑤ 「『収容病棟』クロスレビュー」比嘉徹徳の意見。

<http://eigageijutsu.com/article/399136010.html>

⑥ 『図書新聞』丸川哲史と佐藤賢の対談「『中国』そのものの鏡として」

https://www1.e-hon.ne.jp/content/toshoshimbun_3161_1-1.html

⑦ この段落、小泉義之「奇妙な愛がわれわれを見放すときは決して来ないからには」参照。

<http://www.r-gscfcs.jp/pdf/%E5%8F%8E%E5%AE%B9%E7%97%85%E6%A3%9F%E8%A9%95.pdf>

⑧ 船橋淳「ワン・ピン定食／停滞の作家の現在地——『収容病棟』」
<http://webneo.org/archives/22868>

⑨ 前掲「『収容病棟』クロスレビュー」比嘉徹徳の意見。

『無名者』（2009年、92分）

王兵はあるトークで次のように語っている^①。2006年、旅行中にたまたまこの男の居住地に行き当たった。はじめ話しかけたとき、彼は話をしようとしなかった。「お名前はないのですか」と聞くと、「名前はない」と答えた。彼は言葉によるやりとりを望まなかったので、王兵も彼の過去についてたずねることをしなかった。

王兵が興味を引かれたのは、彼が毎日荒地を開墾し、一年中働いていることだった。肥やしをやり、耕し、植物を植える。そのだいたいを撮った。2006年に出会ってから徐々に撮影し、ほかの仕事の合間に、二・三ヶ月あるいは半年に一度くらい会いに行った。時間が取れるときに行って、いくばくか素材を撮り、2009年に編集して一つの作品にした。

この男は乞食をしているわけではなく、自力で、自分の労働によって、自分のやり方で暮らしている。と同時に、人々から離れており、周辺の人々とも往来はない。「彼の過去の生活について私も聞きたいとは思わなかった……知り合って今まで八年経ったが、彼はずっとこうだ。この8年間、作品が完成した今でも、私は二ヶ月にいったんくらいは彼に会いに行っている。私一人で行くのは問題ないが、誰か連れて行くと、彼は落ち着きなくなる」。かといって、トラクターの音が聞こえてくることからわかるように、この男は山中の修行者のように隠れ住んでいるわけでもない。

撮影方法は、『鉄西区』で発揮されたものを一人に向けておこなっている。あたかも巨大な工場が蒼穹となり、同時にその下にある洞窟にもなったかのようだ。王兵はそっと、執拗に、男の後を追うだけである。監督は、撮影される人物がどこへ行こうと、どれだけ時間がかかろうと、その人物に付き従う。撮影方法として驚かされるのは、男の表情や顔を正面からフレームに収めることができなくても、そのまま撮り続けることだ。いかなる予期も指示も放棄している。日本語で「とる」という語が持つ複数の意味をすべて拒絶している。そこには、撮影される人物に固有の空間、運動やリズムに対する敬意がある。その敬意がなければ、監督は撮影される人物を理解できないし、私たちも同じことなのだ。

ショットは他の作品以上に長いように感じる。しかしそれも、撮影される人物の生活の身振りに向けられた敬

意の結果なのだろう。それゆえ私たちは、あの長さによって、名前のない男の身振りに次第に親しみを感じるようになる。

「道のいうべきは常に道にあらず、名の名づくべきは常の名にあらず」と老子は言ったが、この映画ではその通り、名がないことと言葉がないことが対句になっている。会話は一度もなく、ナレーションもない。まるで、被写体の固有の音を取り返そうとするかのようだ。狭い穴にもぐりこむ音、マイクを擦る衣服の音、男の咀嚼する音、マイクに風があたる音、雨が落ちる音……それら間近な音が、静寂さを際立たせる。男は何も語らず、監督も何も語らない、そのような対句となっている。ドキュメンタリーとしての極限を示すのは、食事の時間にひたすら咀嚼を撮り続け、監督は何も質問しないシーンだ。画面に映る男が興味深いだけでなく、画面に映っていない王兵も興味深い。それは逆に、寡黙な問いを提起し続けているかのようだ。

画面に青い空と緑のトウモロコシ畑が現われて、私たちはそれまでの男のすべてのショットに理が貫いていたことを悟る。そこから先は、得るべき労働の賜物が得られるのかというドラマチックなスリリングさすら感じさせられる。

最後のシークエンスには、正面からの近影ショットと、男が独りぼっちにされている引きのショットとが対照的に現われる。この特徴的な方法について、ディディ・ユベルマンが面白い指摘をしている^②。この対照性は、自分に似た存在 (ses semblables) の表象に関する王兵の、非常に弁証法的な性質を表しているという。この弁証法が、王兵の特長であると同時に、危うい均衡の上に立った歩み、その社会的位置づけの難しさ、既存のモデルには還元しえない美学的な力となっている。この対照性は、直接記述と間接記述の均衡である。直接記述では、ダイレクト・シネマに由来し、予測しない、検閲しない、ショットを区切らないという規則を採用している。つまり、撮影される諸行為の実際の時間を尊重する方法である。間接記述とは、一種の暗示であり、明確に示すと消えてしまうようなもの、形をとらなくても受け入れられるものを示す方法である。例えば王兵は、男が使っている箸や男の土に汚れた手を確固として鮮明に映し出す。つまり、貧困の物質的な現象へと入っていく。その一方で、男の卑俗さを捨てて、透明さを見いだそうとし、男を見る者におのずとその場に浸透して理解できるようにする。この後者の美学を、ユベルマンはフランスの中国哲学者

であるフランソワ・ジュリアンの中国美術研究、特に石濤の絵画の解釈からインスピレーションを受け、「王兵の映画は画僧・石濤の伝統的な教えに文字どおり従っているように思える」、「石濤は、自分の仕事の痕跡を残さずに諸形態を制御する」と指摘している。王兵が表現しようとするのは「現象を受け入れること」であり、この映画はそのために完全に捧げられているとユベルマンは言う。

王兵がそのような撮影方法をしたのは、男の生活に人間生活の原初のかたちと尊厳性を感じるとともに、自分に似たものを見ていたからでもあろう。「私たちは集まって共同生活を必要とする人間だが、なかには他の人と生活するのを嫌う人もおり、私自身も多くの人と生活することが嫌いな人間だ……しかし私は、彼といっしょにいたり、庭で彼を待たたりしているときに、リラックスを感じる。彼も、私が彼のところに行くたびに、リラックスを感じていると思う。彼は私に何ら敵意や警戒心を持っていない。いっしょにいと、話はしなくても、非常に簡単にコミュニケーションができ、リラックスできる。彼が私になにか助けを求めたら、できることをしてやるのは、なんでもないことだ。たとえば「お金が必要なら、少しあげてもいいですよ」と言ったら、はっきりお金はいらないと言われた。「では、なにかいるものは？」と聞くと、タバコがほしいとか、ライターなどの生活用品がほしいと言われた」^③。

王兵が彼にあげた農具などはすぐに盗難にあったという。こんな生活をしている、わずかな物しか持たない人の物が盗まれるという現象に、王兵はショックを受けた。「正常な社会生活とは何なのか？」という疑念にとらわれたという。「この人の生活を変えたくないし、この人のことが大好きで、撮りたいと思って映画に撮った。この映画にどんな意義があるか自分にもわからないが、自分としては、この人を撮りたくて撮ったのだ」。

注

① Jihlava International Documentary Film Festival (2014) における王兵のトーク。

<https://www.youtube.com/watch?v=niw8JYL7i38>

② Georges Didi-Huberman, *Peuples exposés, peuples figurants : l'œil de l'histoire*, 4, Paris : Ed. de Minuit, 2012. この引用については、山口俊洋氏にご教示いただいた。

③以下の引用は注①に同じ。

[次号につづく]